



令和5(2023)年度 堺アートスカウンシル 活動報告書



令和5(2023)年度 堺アートスカウンシル 活動報告書
2024年11月発行

<発行> 堺アートスカウンシル (堺市文化課)
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3-1
TEL 072(228)7143
FAX 072(228)8174
MAIL bunka@city.sakai.lg.jp

<デザイン> 株式会社松岡印刷所



堺アートスカウンシル公式SNS



はじめにープログラム・ディレクターからのごあいさつー 3

堺市の文化芸術関係図 4

堺アーツカウンシルについて 6

堺アーツカウンシル令和5年度活動総括 8

堺市文化芸術活動応援補助金について 9

令和5年度採択事業紹介 10

文化芸術活動に関する相談・対話 19

モデル事業 20

勉強会 22

交流会・広報 23

座談会ー令和5年度の活動を振り返ってー 24

はじめにープログラム・ディレクターからのごあいさつー



撮影：のり やまもと

堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター

上田 假奈代

人が集い交流することが憚られた3年あまりのパンデミックを経て、2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、やっと人々が動き始めて夏秋がすぎ、2024年のお正月に能登半島で地震が起こりました。人々が助け合う姿がある一方、世界では戦争が続いています。

日本の自殺率は高く、こどもの貧困率は悪化し、厳しい状況の高齢者が増え、ますます格差が広がっています。

堺市では文化芸術活動が地域に根つき、子ども食堂や地域活動に創造的な視点が入ることや、文化芸術がコミュニティのつなぎ役を担う役割を持つことも期待しています。

ゆるやかなつながりはお互いを気かけ、孤立を防ぎ、健康に寄与し、災害時など、もしもの時に役立ちます。

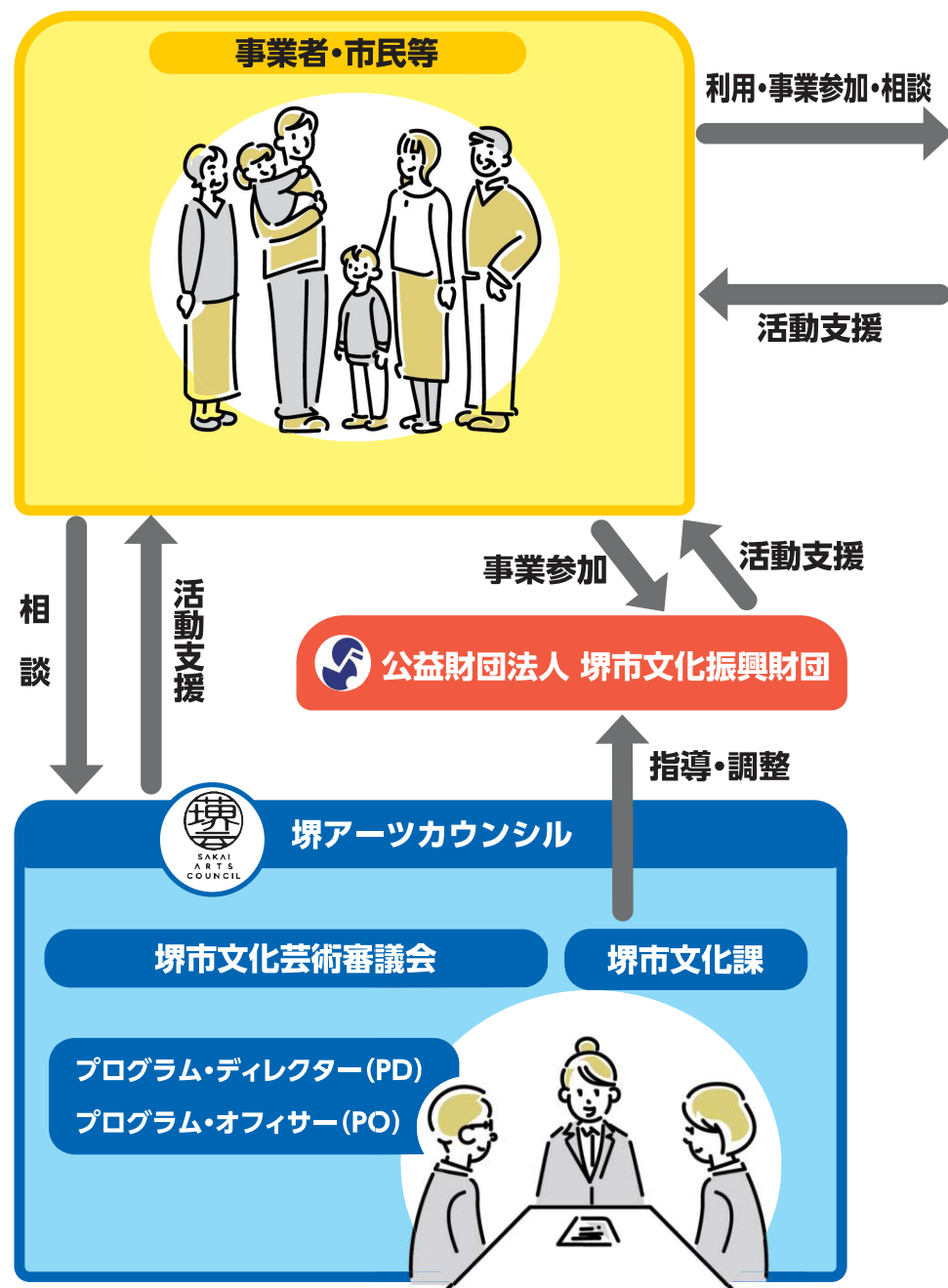
能登半島ではこれまで数年間開かれていた芸術祭を通して、全国から応援の声があがっています。芸術祭をきっかけに他者と関わりが生まれたことが、未来を支えることになったのです。

文化芸術はその効果をわかりやすく数字で表すのは難しいのですが、市民のみなさん、文化芸術の担い手のみなさんとともに、文化芸術活動の雑多なプロセスを大切にし対話や経験を重ねることが大事だと考えます。目的や目標に想定していないことが生まれるのも他者に関わる文化芸術の特徴です。そうした可能性を含む「今」が紡がれて、物語が織り込まれて、未来につながってゆくと思います。

堺での文化芸術の機会と場がもっと耕されるよう、堺アーツカウンシルは活動していきます。

ずっと先の未来の堺の人たちが、堺に文化芸術が、アートがあってよかった、と思えるように。

令和6年（2024年） 秋



堺アーツカウンシルについて

堺アーツカウンシルとは

専門知識を有する人材が、文化芸術に携わる人々を支援することで文化芸術の振興を図り、文化芸術を活用して子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化といった様々な分野の社会的課題の解決をめざす組織で、令和3年1月に設立しました。

文化芸術に関する専門知識を有するプログラム・ディレクター（PD）とプログラム・オフィサー（PO）を中心として、堺市文化芸術審議会、堺市文化課で構成しています。

主な活動内容

文化芸術活動に関する相談受付
及び視察

補助金申請
・
活動サポート

勉強会・交流会
の開催



モデル事業の実施

広報活動

調査研究

プログラム・ディレクター (PD)



上田 假奈代

詩人・詩業家

専門分野：ことば、存在の表現

撮影：坂田舞

1969年奈良県吉野生まれ。「ことばを人生の味方に」、2003年大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココルーム」を立ち上げ、2008年西成・金ヶ崎に移動。2012年まちを大学に見立てた「金ヶ崎芸術大学」、2016年ゲストハウス開業。



大澤 寅雄

専門分野：文化政策、アートマネジメント

© Nonoko Kameyama

1970年滋賀県生まれ。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。地域文化を生態系として観察する「文化生態観察」を実践中。合同会社文化 commons 研究所代表、NPO法人アートNPOリンク理事長。



中脇 健児

専門分野：コミュニティデザイン、ワークショップ、ソーシャリー・エンゲイジド・アート

伊丹市文化振興財団に14年間所属。領域はアート、コミュニティプログラム、地場産業支援、教育、福祉、ファシリテーションやワークショップの専門家育成など。「場とコトLAB」代表。NPO法人こととふラボ理事。大阪芸術大学芸術計画学科准教授。



柿塚 拓真

専門分野：音楽マネジメント、芸術団体運営

※令和6年3月まで就任

日本センチュリー交響楽団、神戸市室内管弦楽団/混声合唱団等で音楽事業制作に従事。2019年度国際交流基金アジアフェローシップ。アジア各地や英国の団体との共同事業等海外団体との事業も手掛ける。現在、(公財)九州交響楽団 音楽主幹補佐兼事業部長。

プログラム・オフィサー (PO)



青木 敦子

専門分野：子どもとアート
※令和6年3月から就任

2003年からアートマネージャーとして働く。NPO recip（特定非営利活動法人地域文化に関する情報とプロジェクト）を2004年に設立。2016年からフリーランスで子どもの育ちを〈アート/表現〉でサポートする活動に注力している。



川那辺 香乃

専門分野：アートプロジェクト、ファシリテーション、身体表現

専門は教育現場におけるアートワークショップのコーディネート。地域コミュニティでのアートプロジェクト、社会的課題をテーマにしたワークショップ、障害者の文化芸術活動等にも携わる。アートプロジェクトのネットワークづくりに奔走中。



宮地 泰史

専門分野：舞台制作マネジメント
※令和6年3月まで就任

河内長野市、八王子市の文化振興財団にて演劇、オペラ、ミュージカルなど、様々な舞台の企画・制作を担当。現在は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールのチーフマネージャー。謎解きとクラシック音楽を掛け合わせた「音楽探偵バツハの事件録」を企画し各地で展開中。大阪芸術大学芸術計画学科客員教授。



宮浦 宜子

専門分野：教育、地域コミュニティ、食
※令和6年3月まで就任

教育現場や地域コミュニティでのアートマネジメントに携わった後、異文化との出会いの場としての「食卓」にアートとの共通性を感じ、食のイベント・ワークショップの企画・運営、執筆活動などを行う。近年、北海道から関西に移住。特定非営利活動法人芸術家と子どもたち理事長。

堺アーツカウンシル令和5年度活動総括

令和5年度は、以下のとおり、堺市における文化芸術活動の相談、視察を通じた支援活動や、調査研究、情報発信を行った。

①相談

令和5年度の文化芸術活動に関する延べ相談件数は87件。堺アーツカウンシル（以下「堺AC」）が本格的に活動を開始した令和3年度が42件、令和4年度は56件と順調に増加し、事業開始以降3年間で2倍以上の相談件数となっている。当年度の初回の相談が36件、再来が51件（58.6％）と、再来の割合が増加し続けている（令和3年度19.0％、令和4年度44.6％）。87件のうち市内の活動の相談が78件（全体の89.7％）で、相談が多かった時期は補助金申請が締め切られる12月に41件と集中した。当年度の補助金対象の活動の相談が75件（全体の86.2％）だが、相談内容の分野としては、次年度の補助金の申請の準備に関する相談が多かった。

過去3年間で相談は累計185件で、その80.0％の相談内容が補助金に関する事業内容である。初年度の令和3年度では申請書の書き方の相談が多かったのが、令和5年度では事業の企画内容と補助金の区分の適正を相談するなど、相談内容にも変化が見られる。

②視察

当年度の文化芸術活動に関する延べ視察件数は26件で、令和3年度の41件、令和4年度の50件と比べると減少した。文化芸術団体の方から堺ACに「来てくれる」相談が増えた一方で、堺ACから文化芸術団体に「出向いていく」視察が減ったこと、相談と視察とが明確に区別し難くなっているケースがあることが要因として挙げられる。視察の初回の訪問は10件、再訪が16件となっている。26件のうち市内の視察が24件で、当年度の補助金に採択された活動の視察が18件となっている。公演や展覧会などの本番の視察が延べ23件で、本番以外の練習・創作、ヒアリングでの訪問も行った。

過去3年間で視察は累計117件。初年度の令和3年度では初回の視察が65.9％、再訪の視察が34.1％だったのが、令和5年度には初回38.5％、再訪61.5％とバランスが反転しており、文化芸術活動に対する堺ACの継続的な支援、あるいは伴走支援的な関係性に発展している。

③調査研究

当年度の補助金対象活動の来場者・参加者に対するアンケート調査では2,009件（前年度1,744件、前年度比15.2％増）の回答があった。来場者・参加者の総合的な満足度で満足層は96.5％、堺ACの目的について肯定的な期待を寄せた回答が87.6％となっている。調査の結果から、来場者・参加者の過半を高齢者が占めていることや、来場者・参加者の在住地に偏りが見られる。

④情報発信

地域で文化芸術活動をされている方のための勉強会を4回、交流会を4回実施し、延べ参加者数は70人となっている。

堺ACが本格的に活動を始めから3年目となる令和5年度も、相談・視察、調査研究、情報発信という活動を通じて、文化芸術に携わる人たちの支援、文化芸術の振興、文化芸術を活用した社会的課題の解決をめざす取組を継続した。当年度及び過去3年間で明らかとなった事業の結果（アウトプット）と成果（アウトカム）として以下のような点を挙げることができる。

- 対前年度比で、相談件数は55.4％の増加となり3年間で2倍を超えた。地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向、かつ継続的なコミュニケーションが活発化している。
- 引き続き堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談を積極的に受け入れた。3年前には補助金の制度や記載方法といった形式に関する相談が多かったのが、企画のアイデアや具体的な内容と補助金の制度や目的との適正に関する相談など、今まで以上にPD、POの専門性と経験が求められるケースが増えている。
- 相談の再来や視察の再訪により、コミュニケーションの双方向性が強まり、「相談」と「視察」の区別を越えた「伴走支援」に発展しているケースもある。一方の課題として、初回の相談や視察の割合が減少していることから、地域の文化芸術団体との新たな出会いや、堺ACによる主体的・能動的な活動の実態の把握のためには、現場を直接訪問する視察にも再び注力することが求められる。
- アンケート調査では、3年間で調査対象数が着実に増加し、前年度と同水準で補助金対象活動の来場者・参加者の高い満足度と、堺ACに対する肯定的な期待を確認した。また、勉強会や交流会を通じて、地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向の交流の機会を創出した。

前述の成果は、令和3年2月に策定された「第2期堺文化芸術推進計画」の重点的施策1-1「文化芸術を通じた社会的課題の解決」、1-2「すべての人が文化芸術を享受できる機会の充実」、1-3「市民の文化芸術活動の機会の提供」に沿った活動の結果であり、堺ACの活動は重点的方向性1「文化芸術とともに生きる」への寄与が認められる。

次年度以降も引き続き実績の推移や変化を測定し、成果や波及効果を把握しながら、堺市の文化芸術振興を着実に進めていきたい。

堺市文化芸術活動応援補助金について

堺市文化芸術活動応援補助金とは

歴史ある堺の文化の良さを継承し、市民の文化活動の振興を図り、地域文化の創造に努め、また、文化芸術の力を活用して、子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化等の幅広い分野における社会的課題の解決に資する事業の実施に要する経費を市が補助することにより、自由で心豊かな市民生活の実現及び都市魅力の創造に寄与することを目的として令和3年に創設した補助金です。

より効果的な事業実施をめざして、堺アーツカウンシルが申請時の事業の組み立てについての相談受付や視察、事業実施の際の伴走支援を行っています。

次頁以降で、堺アーツカウンシルが実際に視察した令和5年度採択事業の一部をご紹介します。

補助金の区分

	一般補助		特別補助		
区 分	スタートアップ支援事業	地域文化力向上事業	市民文化活動推進事業	共生社会推進事業	舞台芸術創造発信事業
目 的	地域文化力の向上		市内全域での文化力の向上、社会的課題の解決		
補助上限額	10万円	50万円	100万円	100万円	300万円
対象活動内容	地域における小規模な文化芸術活動	地域における文化芸術の現状を踏まえた地域一体となった事業	市民が身近に文化芸術に触れる機会を提供する事業	共生社会を推進するための社会包摂型事業	質の高い芸術文化に触れる機会を市民に提供し、市民満足度の向上及び都市魅力の創出に寄与する事業
補助率	補助対象経費の1/2以内				

令和5年度申請・採択件数

	一般補助		特別補助			合計
申請区分	スタートアップ支援事業	地域文化力向上事業	市民文化活動推進事業	共生社会推進事業	舞台芸術創造発信事業	
申請件数	11件	28件	2件	1件	5件	47件
採択件数	10件	18件	2件	0件	4件	34件
採択金額	961,000円	7,258,000円	1,972,000円	0円	7,730,000円	17,921,000円

令和5年度採択事業紹介

スタートアップ
支援

いくつになっても、子どももいっしょに吹奏楽を楽しむ工夫満載

事業者 堺・エルターン吹奏楽団

事業名 堺・エルターン吹奏楽団 第一回定期演奏会

日程 令和5年7月2日(日)

会場 堺市立梅文化会館 ホール



子どもも大人も楽しめるコンサート

概要

親子向けの吹奏楽の演奏会。小さな子どもも楽しめる7曲を演奏。子どもの指揮者体験コーナーや子どものダンス隊といっしょに観客もリズムに乗れるような参加型の演奏会。

参加者：560人、演奏者：51人、お手伝い：10人

執筆者 所感

梅雨のなかの晴れ間とあって、梅・美木多駅から会場に向かって、ベビーカーを押して親子連れが歩いていく姿が木々の緑の眩しいなかで映えています。ロビーは青い風船で彩られ、演奏者の手書きの紹介が貼り出され、子どもたちが短冊に願い事を書く七夕のコーナーがあり、歓迎ムードが表れています。

観客席は小さい子どものいる家族でほぼ満席。ステージは「となりのトトロ・メドレー」や童謡などが吹奏楽にあわせたアレンジで進みます。「アンパンマンのマーチ」では指揮者はバタコさんの格好、演奏者はキャラクターのお面をかぶる演出も。観客席から子どもが手をあげて壇上へ上がり指揮者体験をしたり、子どもダンス隊も登場し踊りました。20分の休憩では授乳室用と和室の用意もあり、配慮が行き届いています。パンフレットには「子どもの泣き声も音楽の一部として温かく見守っていただければ」と記され、楽団の姿勢が表されています。

3年前に3人の母親が吹奏楽団を結成し、今では50人に。演奏しているメンバーは吹奏楽経験者だけれど、今は演奏していないという人が多く、初心者や子連れ参加も歓迎。現在は年齢など関係なく、多様な団員が在籍しています。今後もっと活動を活発にしていきたいという抱負もお聞きしました。(上田PD)

地域文化力
向上

草の根で広がるシニア劇団、人生経験をいかして

事業者 スティックシアター堺

事業名 シニア劇団スティックシアター堺 第5回公演「ありばば」

日程 ワークショップ：令和5年4月25日(火)、5月11日(木)

公演：令和5年5月27日(土)

会場 サンスクエア堺 サンスクエアホール



演劇舞台の様子

概要

演劇初心者のためのワークショップを2回行い、シニアによる演劇公演を実施。公演動画を一ヶ月余り公開。参加者：ワークショップ 37人、公演 135人（観客数は103人）

執筆者 所感

演劇のワークショップと公演を組み合わせた事業。ワークショップはシニアの心身の健康と世代間交流を目的に行われました。

公演の会場はJR堺市駅すぐのバラ園を通りすぎた先にあるサンスクエア堺。ホールの受付ではマスク持参でない観客にマスクを渡すなど配慮がされていました。手渡されたパンフレットには役名などが記された俳優の顔写真と劇中劇を楽しむ仕様となっていて、関わる人たちの名前も記載されています。開始前にもアナウンスでお手洗いへの誘導など、きめ細やかな導入から始まりました。演劇の内容もシニアの等身大の物語で、中高年のそれぞれのままならなさにならずに観客も多かったことでしょう。

無事に熱気ある本番が終了し、ロビーで俳優たちが衣装のまま写真撮影に応じていました。主宰の太田さんは、「練習日に全員が揃わないことも多く、演出家には苦勞をかけています。シニアの人生や社会経験からにじみ出る表現を演ずるという形で引き出し、作品として結晶化してくださる演出家に感謝しています。今後は、ユニットでの朗読劇の出張公演や、それぞれの特技や経験を生かし演劇表現と融合させたワークショップ開催などにも積極的に取り組んでいきたい。我々の劇団だからこそできる新しいイベントを企画したい」とのこと。人は必ず歳をとりますから、その時々活躍の場があることが望まれます。演劇はさまざまな役割があり、本番という見せ場があり、舞台を終えた後も仲間がいます。劇団はシニアの活動を促し地域に波及する意識を持ち活動をされています。(上田PD)

令和5年度採択事業紹介

地域文化力
向上

身近な会館での集いやすいコンサート

事業者 鳳フルートアンサンブル

事業名 第2回おいでやす!!堺で!楽楽フェスティバル♪

日程

令和5年6月17日(土)

会場

堺市立西文化会館 ウェスティホール



楽器演奏に合わせて披露されるコーラス

概要

演奏を聴く機会が少ない方々にも楽しんでもらえるよう親しみのある曲を織り込んだコーラスを堺市内の9つの出演団体が披露するフェスティバル。最後には出演団体全員での合唱があり、観客や会場が一体となった。

出演者：99人、参加者：約300人

執筆者
所感

JR鳳駅から、真夏日のなか10分ほど歩いて西文化会館に。改修された大ホールは落ち着いた茶色の色合いの舞台、客席には車椅子専用席があり、お一人、楽しみな様子で座っていらっしゃいました。客席には高齢の方が多く、お友達同士の話し声があちこちから聞こえてきます。

9つの団体が3曲ずつ披露します。舞台には高齢の方の姿も多く、杖をついて歩く方、椅子に座って歌う方もいて、いくつになっても表現の場は生きる喜びになるのだと思いました。

客席に3人の子どものお母さんがいました。子どもに聞いてみると「ばあばがでるよ」と、笑顔で舞台を見つめていました。そして「もう2回目だよ。音楽好きだよ」と、話してくれました。赤ちゃんを抱いたお母さんが軽く会釈をされます。幼いうちから芸術に触れる機会が自然と作られています。

最後は全員での合奏。ゆっくりと100人が舞台上に並びまでの間は、客席にむけて「身体を動かしましょう」と腕を伸ばして拍手のゲーム。ほのぼのとした雰囲気会場が包まれました。

約2時間のコンサート終了後は「歌声、素晴らしいわ」、「お元気でなにより」と声をかけあっている姿があちこちにありました。主催者にお話を伺うと、「ここ西文化会館はホーム、落ち着くんです。」とのこと。地域に人々が気軽に集い、芸術を通じてつながりを持つ場に「おいでやす」と迎え入れられた日でした。(上田PD)

地域文化力
向上

世代を超えて、笑いを届け続ける

事業者 大阪講談協会

事業名 地域寄席 “夢浪漫亭 おたび寄席”

日程

令和5年4月23日(日)、5月28日(日)、6月25日(日)、7月23日(日)、8月27日(日)、9月24日(日)、10月22日(日)、11月25日(土)、12月17日(日)、令和6年1月28日(日)、2月25日(日)、3月24日(日)(合計12回開催)

会場

開口神社 瑞祥閣



第573回おたび寄席の様子。旭堂南慶の「将棋大名」

概要

昭和49年から続く「おたび寄席」は、毎月第4日曜日に開口神社で開催。堺にゆかりのある人物などを扱った講談もプログラムに組み込まれ、堺の歴史文化に触れる機会を創出。また、終了後にプロの講談師によるワークショップ「講談塾」も実施され、講談の基礎である「修羅場読み」や演目の一部を体験できる。おたび寄席の参加者：のべ385人、講談塾の参加者：のべ52人

執筆者
所感

まだ暑さが残る9月下旬、開口神社で開催されている第573回おたび寄席に伺いました。第一部は若手講談師が出演、第二部は2名の落語家、3名の講談師が出演し、歴史上の人物から日々の暮らしを題材にしたもので、多彩なプログラムを展開されていました。生の太鼓や三味線の音楽とともに噺家が登場し、登場人物の心情に思わずグッと感情移入する瞬間もあれば、久しぶりに声を出して大笑いするところもあり、語りに魅了された感情が揺さぶられました。どこことなくスッキリした気持ちで会場を出たように思います。希望者を対象にした「講談塾」では講談体験ができ、この日は第二部の演目「春日局」からの1節を練習されていました。

かつては商店街の店内で行っていた寄席はコロナ禍のなか存続の危機もありましたが、現在では大阪で歴史のある地域寄席となりました。少しずつ観客の高齢化が進んできてはいるものの、今も地域の方々とのつながりを大事にしています。この日は初めて新しい高座を使って上演されました。それまで重くて移動が大変だった高座を、地域の方々の協力により軽い材質のものに新調したそうです。

世代を超えて会場にいる方達とともに笑い合うこと、その一瞬一瞬がとても貴重に感じる寄席でした。(川那辺PO)

令和5年度採択事業紹介

地域文化力
向上

地域をつなぐ庭づくり

事業者 社会医療法人同仁会 耳原総合病院

事業名 ～ Playful ～みみはら在宅クリニック

日程

企画制作期間：令和5年5月25日(木)～令和6年3月3日(日)

本 番：令和5年12月21日(木)

ペイントワークショップ：令和6年3月7日(木) ガーデンワークショップ兼完成披露会

会場

社会医療法人同仁会 みみはら在宅クリニック



ガーデンワークショップの様子

概要

患者さんにとって住み慣れた地域(家)でその人らしい生活を支えるため、クリニックの職員と患者さんのご家族、地域住民、アーティスト、造園士が協働し、外壁のペイントワークショップとガーデンワークショップを開催。庭は「おいしい天国の庭」と名付けられ、花はブーケにして患者さんのもとに届けられ、地域住民の憩いの場として活用されている。

参加者：12月21日(木) 30人、3月7日(木) 25人

ファシリテーター：SHOGEN (アーティスト)、小林和子 (ランドスケープデザイナー)

執筆者
所感

「おいしい天国の庭 ガーデンワークショップ～ご自宅で治療を受ける患者さんのもとへ花束を届けた～」に参加しました。前日は雨が降っていたのですがこの日は晴天!

本事業は地域の方々も参加しておられ、そっと覗きに來てくださるなど関心を持っておられる方が多いように見受けられました。今回は花を植えたり、植木鉢にペイントをしたりと黙々とした作業ではありましたが、重いものを一緒に運ぶ際にちょっとした声かけが必要な場面もあり、少しずつ仲間意識が芽生えていくようにも感じました。一方で、地域の方が自宅の庭の植物を株分けして持ってきてくださったり、在宅クリニックに勤めているスタッフ同士の仕事の話が聞こえてきたりと、参加者一人一人が好きなように自由にこの場に入り込んでいてとても居心地が良かったです。ワークショップ終盤には保育園から帰ってきた子どもたちが、新たに外壁にお花を描いて楽しんでいました。この日以外にも12月に外壁のペイントワークショップがあり、冬から春にかけて実施されていたので寒さを懸念していましたが、その心配を吹き飛ばすくらい笑顔に満ちた事業でした。(川那辺PO)

地域文化力
向上

演じて共有する堺の偉人・歴史

事業者 劇団"萌" SACCAI

事業名 演劇で出会う堺の偉人～その1「呂宋助左衛門」

日程

令和6年3月9日(土)、10日(日)

会場

フェニーチェ堺 大スタジオ



劇中劇「ちめの海～銀波を越えて」の出演者。中央は語りの桂紅雀さん

概要

堺ゆかりの偉人を主人公にしたオリジナル台本による演劇公演。シリーズ企画の1回目では「千利休」と「呂宋助左衛門」。

出演者：20人、スタッフ：27人、参加者：203人

執筆者
所感

3月上旬、フェニーチェ堺大スタジオでの演劇公演「ちめの海～銀波を越えて」の夜の回に伺いました。昭和53年から豊中市を拠点に活動する市民劇団「萌」の堺支部、劇団「萌」SACCAIによる公演です。代表者が堺出身であり、また座付き作家が堺の史実に創作意欲をかき立てられ、堺において堺の歴史や偉人のことをオリジナル台本で演劇公演するために令和2年に立ち上げたとのこと。

2作目である今回は、室町時代にルソン(フィリピン)との交易を切り開いた貿易商人の呂宋助左衛門と豊臣秀吉の茶頭として仕えながら侘び茶を大成させた千利休が取り上げられています。

助左衛門がルソンから壺を持ち帰り、千利休がその価値を認め、それならばと秀吉が買い上げるといふ展開が目の前で繰り広げられることで、町人が力を持っていた自由都市・堺のイメージが身近に感じられます。

また、利休が秀吉に茶を立てる緊迫感のある場面では、劇中で観るからこそその、侘び茶の精神が伝わってきます。登場するのはテレビや舞台で何度も演じられてきた歴史上の人物ですが、出演者の個性と混じり合った存在感があり、市民劇団ならではの魅力を感じました。

豊中市では、地域子ども教室などで公演やワークショップを続けているとのこと、今後は堺市でもそのような活動を展開していきたいと考えているとのこと。これまでの実践経験をぜひ堺でも活かして頂きたいと思いました。(宮浦PO)

令和5年度採択事業紹介

地域文化力
向上

怪談を通して、江戸時代の堺へ

事業者 濱田 さち

事業名 堺の町をそぞろ歩き隊「怪談と妖怪めぐり」

日 程

令和5年10月1日(日)、10月14日(土)、10月28日(土)

会 場

10月1日(日) 開口神社瑞祥閣 開口神社～妙法寺～紀州街道筋
10月14日(土) 開口神社瑞祥閣 開口神社～菅原神社～首切地藏
10月28日(土) 開口神社瑞祥閣 開口神社～ザビエル公園～堺戎神社



そぞろ歩きの様子。菅原神社前。

概 要

江戸時代、堺で起きた怪異が綴られた「沙界怪談実記」を題材に、朗読・怪談・まち歩きを行うプログラム。「沙界怪談実記」は19話まで現代語訳され、会場には1話ごとの絵と怪異が起きた場所がパネルで紹介されている。怪談は落語家や講師が、有名な「飴買い幽霊」や新作まで幅広く披露された。そぞろ歩きでは古地図をもとに、「沙界怪談実記」や怪談にゆかりのある場所を巡った。

参加者：10月1日(日) 15人 10月14日(土) 11人 10月28日(土) 15人

執筆者
所感

10月14日(土)、どんよりした曇り空の中で開催された「堺の町をそぞろ歩き隊『怪談と妖怪めぐり』」。まずは開口神社にて、「沙界怪談実記」の朗読と演奏を鑑賞しました。各物語の挿絵がスライドで表示され、その当時の市井の人々の生活に想いををします。

旭堂一海さんによる開口一番は、小泉八雲の怪談「幽霊滝の伝説」からの一幕。旭堂南湖さんは、最近滋賀県の怪談をまとめた本を出版されたことから、琵琶湖タワーにまつわる怪談と、「小夜衣草紙」を話してくださいました。登場人物が少しコミカルで、お話に自然とのめり込んでしまいました。

そぞろ歩きは、陸奥 賢さんが案内人となり「沙界怪談実記」に出てくる「鬼の腕が見つかったとされる場所」や「飴買い幽霊」のモデルになった僧が建立したとされるお寺など、古地図を見ながら、牢屋敷があったとされている場所なども巡りました。じっくり歩いてみると、至るところにお地藏さまが祀られていることも新たに発見し、堺の歴史の深さに少し触れたように思いました。途中、雨が強くなってしまい残念でしたが、機会があればまた自分でも歩いてみたいです。(川那辺PO)

市民文化
活動推進

バレエにはじめて出会う人のために

事業者 有限会社 野間バレエ団

事業名 ～野間バレエ団プレゼンツ～「バレエを楽しもうinフェニーチェ堺2024」

日 程

令和6年2月18日(日)

会 場

フェニーチェ堺 大ホール



舞台の最後に全員がステージに上がると、大きな拍手。写真：OfficeObana

概 要

バレエ鑑賞初心者の方にも楽しめるよう、「観る」「知る」「体験する」を一度にできる内容。「くるみ割り人形」を軸に「バレエマイム講座」、「楽しいバレエ音楽解説」などを上演。

参加者：852人、出演者：43人

執筆者
所感

2月にしては暖かい日曜日。フェニーチェ堺に向かう人たちの服装もすこし春めいていました。大ホール前は家族連れや待ち合わせの人たちで賑わい、華やかな雰囲気。「はじめてのバレエ鑑賞マナー」や子ども向けに「小さなお友達のためのパンフレット」が配られ、子ども連れの方にとって歓迎されていると感じられる配慮がありました。

幕があがると、演出家の野間景さんから「パキータ」、「ドン・キホーテ」のあらすじや見どころが語られ、はじめてバレエに出会う人にとってわかりやすいものとなっています。特別ゲストの青島広志さんの軽妙なトークとピアノ演奏では、チャイコフスキーが同性愛者でロシアではいじめられ、死刑となることから自殺した話が語られます。社会と芸術、そして人間の営みは綺麗事ではないことを伝えながら、舞台は進行します。また中盤にはマイム講座があり、会場の観客は座ったまま通称「居酒屋ダンス」の振り付けを教わり、上演中に観客席までダンサーがやってきて観客たちを盛り上げます。次に、雰囲気はがらりと変わり、青島さんの生演奏と名プリマの「瀨死の白鳥」が上演され、フィナーレの「Sing Sing Sing」へ。

回数を重ねてきた「バレエを楽しもう」。バレエへの入り口を広げるために親しみやすい構成演出がなされ、会場をあとにする観客たちの楽しそうな表情も印象的で、堺市でバレエが根づいていることを感じました。(上田PD)

令和5年度採択事業紹介

舞台芸術
創造発信

楽団活動を続けてきたからこそ新しい境地へ

事業者 堺フィルハーモニー交響楽団

事業名 堺フィル スプリングコンサート

日程

令和6年2月11日(日)

会場

フェニーチェ堺 大ホール



ムソルグスキー「展覧会の絵」を演奏している舞台全景

概要

フェニーチェ堺でオーケストラのコンサートを開催。公演には小中学生と保護者を招待し音楽文化に触れるきっかけとするほか、会場内で堺市の歴史や文化について紹介する映像を上映するなど、音楽を楽しむのとあわせて、堺市のことを知る取組となる。

参加者：1,178人、出演者：97人

執筆者
所感

大所帯の楽団らしく編成、人数の大きなオーケストラの名曲3曲で構成されていました。特にリヒャルト・シュトラウスやムソルグスキーは演奏に高い技術が必要な作品だが、それに挑戦していて意欲的な演出。

まず特筆すべきは来場者数。1、2階席の利用（約1,400席）であったがフェニーチェ堺大ホールが満席で自由席のため前半は立ち見が出たほど。長く続けてこられたことで、この楽団にお客さんや支援者が付いている証拠と思われます。

そして、今回の特徴は舞台奥に設置されたスクリーン。そこに開場中、休憩中は堺の歴史や文化施設を紹介する映像、開演中はその時、演奏している作品にまつわる映像が投影されます。特に組曲「展覧会の絵」では、それぞれの音楽のインスピレーションの元となった絵画と作品を説明する文章が流され、音と絵と知識で公演を楽しむことができました。ややもすると視覚は音楽の邪魔になることもありますが、今回は絵の扱い方、添える文章等の編集や映像の切り替わりなどのオペレーションも適切で大いに楽しむことができました。依頼があればプロ、アマ問わず他の楽団に貸し出しても良い水準と感じました。このことは従来の楽団活動と新しい聴衆の獲得の融合を数年かけて熟考し、実現された結果であり、素晴らしいと感じました。（柿塚PO）

文化芸術活動に関する相談・対話

文化芸術活動や補助金・助成金等に関するお困りごとについて、対面、電話、メールなどで相談・対話の機会を設けました。

<内訳>

○一般相談・堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談の別（件）

○活動分野別（件）

事業内容(補助金)	75
事業内容(補助金以外)	5
組織運営	3
他との連携	3
その他	1
合計	87

市役所訪問	47
説明会	16
現地訪問	4
メール	9
オンライン	2
電話	7
その他	2
合計	87

音楽	30
美術	14
伝統芸能	5
メディア芸術	3
文学	3
書道	3
舞踏	2
芸能	1
茶道	1
その他	25
合計	87

相談事例

ご相談

書のワークショップを障害者施設で行いたい。どうしたらできますか。

ご相談

堺市内で福祉を中心に活動する社会福祉協議会。地域や福祉に関心のない層に地域に関心をもってもらうためのきっかけをアートによってつくりたいでしょうか。

ACからのアドバイス

「障害者が住み慣れた地域で、主体的に、共生、協働のもといきいきと輝いて暮らせる社会の実現」をめざして整備されている堺市立健康福祉プラザをご紹介しました。企画書を持って相談されたところ障害者施設を紹介いただく流れとなりました。それだけでなく、プラザの職員さんから障害のある方と芸術活動をすることの意義を話していただき、相談者も事業の輪郭をしっかりとらえることができました。紹介いただいたことで、想定以上の数の施設からお申込みがありました。

ACからのアドバイス

地縁組織である自治会の高齢化という変化に、子ども食堂のネットワーク作り、ソーシャルコーディネーターを配置するなどしてきた社協。そこで、ある地域の活動を事例研究とし、定期的に集まり情報交換を行いました。想定していなかった取組が生まれ、また新しい事例にも出会い、年度末には、社協のソーシャルコーディネーターの研修としてその地域での取組を学び直しました。具体的なアートプロジェクトが立ち上がったわけはありませんが、アート思考によって、新しい風を送り込んだ取組となりました。

ご相談

古民家のレンタルスペースを3年前にたちあげたが、ほぼ活用できていない。どうしたらいいでしょうか。

ACからのアドバイス

「堺市の文化的な場所になりたい」という想いで始められたが、企画などの経験がないとのこと。まずはご自身がさまざまな活動に参加しながら、どんな活動に取り組みたいのか、どんな場にしたいのか言語化しつつ、ひとつずつ具体的にして、仲間をみつけていきたいと思います。堺市文化芸術活動応援補助金をご紹介し、堺アーツカウンシルが申請のサポートをしているのでご活用くださいとお伝えしました。

堺市では、令和3年に「第2期堺文化芸術推進計画」を策定し、「文化芸術を通じた社会的課題の解決」を重点的施策に挙げています。その一つとして、まずは文化施設職員のスキルの底上げが必要という考えから、堺市の文化施設に所属する企画担当職員等を対象とした座学・実践の研修事業を堺市文化振興財団と協働して実施しました。

令和5年度は昨年度の座学を経た実践編として、参加者がチームに分かれ、3つの現場で、アーティストと連携をしてワークショップを企画実施しました。受け入れ先へのヒアリング、アーティストとのコミュニケーション、プログラムの組み立て方等、制作過程で関係者と対話することで、研修参加者が社会包摂やワークショップを各自が自分の言葉で語るレッスンにもなりました。

実施期間：令和5年4月～令和6年3月までの月1回程度

研修会場：フェニーチェ堺

講師：上田PD、中脇PO、常盤成紀（堺市文化振興財団事業係長）



記録冊子PDF公開中▶▶▶

https://note.com/sakai_bunshin/n/nf04b75a82039

●子ども食堂

会場 東深井つどい場食堂ふらっと（深井沢町会館）

対象 午前の部／小学1年生～3年生、
午後の部／小学4年生～6年生

期間 令和5年11月12日（日）、11月26日（日）

アーティスト 樋口ミユ（劇作家・演出家）、
中川圭永子（俳優）



内容

つどい場食堂ふらっとさんへのヒアリングでは「子どもたちの間での、コミュニケーションの仕方に課題があると感じている」、「自己表現ができて、お互いを認め合うようなワークショップができればありがたい」という声や悩みを伺えたため、アーティストに「自分と違う他者への想像力と、伝えることの面白さを体験できる内容で」と依頼しました。

当日は「おしえてほしい～見て・伝えるワークショップ～」と題し、身体を動かしたコミュニケーションゲームや視覚を制限した体験、演劇の力を借りた物語づくりを実施しました。午前の部、午後の部の合間には、子ども食堂が用意してくれたお昼ご飯を全員でいただきました。見学の保護者の方からは「ストーリーづくりや、演じるだけでなく、舞台セットをつくることや背景をホワイトボードに描くなど、恥ずかしがり屋の子でも大丈夫な携わり方が面白く、話し合う様子が垣間見れて良かった」という声もありました。

●病院

会場 耳原総合病院

対象 耳原総合病院で働く医療従事者全員

期間 令和5年12月5日（火）～令和6年1月20日（土）

会場 職員専用廊下

アーティスト アサダワタル（文化活動家）



内容

耳原総合病院へのヒアリングでは、地域住民からのカンパや要望から設立された病院の歴史、地域密着型の病院経営の内容、アートディレクターが常駐して様々な活動を日々実施されていることを聞きました。一方で「若手職員や中途採用職員は、日常業務が多忙のため地域活動への参加を増やすこともできず、歯がゆい現状がある」という職員内での意識ギャップに悩んでいる声がありました。そこでアーティストには「職員同士の新たな関係を築けるような企画を」とリクエストしました。そこで耳原総合病院開院70周年の折につくられた「年表（Chronologies）」に着目し、職員の「赤ちゃんの頃の写真」と、初めて自覚的に買ったレコード・CDのジャケット写真とエピソードを集めて年表とともに展示。「ラジオ番組」として設けられたBGMを廊下で流しました。セクションや世代を超えて、忙しいなかでもほんのりと職員同士のコミュニケーションが生まれ、プロジェクト期間中も少しずつ展示が増殖しました。

●福祉施設

会場 リーどけあ

対象 リーどけあのメンバー

期間 令和5年10月18日（水）、11月28日（火）

アーティスト 片岡祐介（音楽家）
加藤文崇（映像）
エメズギ（ダンサー）
上田假奈代（詩人）



内容

リーどけあは、小規模多機能ホームと就労継続支援B型こはな、隣にどら焼きカフェ米花を併設。そこには「地域とつながりたい」、「ふたつの施設の交流を促したい」という想いがあることがわかりました。また、リーどけあでは認知症の方が多く、身体を動かしたいというニーズに対し、YouTubeで体操映像を流し、スタッフが一人一人に声をかけ、毎日、体操を実施していることもわかりました。そこで研修参加者たちは「盆踊りのような踊りをつくって近くの公園で地域の人たちと祭りがつくれたら」という壮大なビジョンを描き、日々の練習のために日常的に使える「リーどけあの体操動画」があればいいのではと、アーティストの方々に依頼しました。

ワークショップは間を空けた2日間。初日は合作俳句づくりと作曲。2日目は振り付けと録音と動画撮影。2つの施設のメンバーが作成したオリジナルの「リーどけあ体操」の振り付け動画が完成しました。ワークショップ中には、ベッドで寝たきりの方が自ら起き上がり椅子に座るなど、普段見られないような積極的な行動がありました。

勉強会 地域でのアート活動を学ぶ勉強会

堺市で文化芸術活動されている方、文化芸術活動に興味のある方等を対象に、各テーマについての知識を深め、情報交換する機会とすることを目的に、堺AC主催の勉強会「地域でのアート活動を学ぶ勉強会」を4回開催しました。

本勉強会では、POそれぞれの専門性をいかし講師をつとめ、ファシリテーターとして中協POが進行し、随時疑問点や詳しく知りたいポイントを掘り下げ、参加者の理解を深めました。



●第1回

テーマ 〈企画・協働〉広げつつ自分たちも磨く協働
日程 令和5年6月26日(月) 13:30～15:30
会場 堺市役所本館3階第1会議室
講師 柿塚PO
参加者 8人

内 容

柿塚POから「子どもコンサート」という従来のプログラムを見直し、創造的に組み立て広がりを持たせることで、徐々に楽団員たちが刺激をうけ、輪が広がっていった好循環の事例が紹介されました。参加者からは地域とのつながりのつくり方や、事業の継続性についての悩みが聞かれました。柿塚POは「課題とともに新しい創造をうみだすことがおもしろい、という純粋な動機が肝心だ」ということとともに「こうした活動は儲かることはないが、視野が広く経験を積んでいる団体であると認知されブランディングが進めば、結果的に次の仕事につながる」と話されました。

●第3回

テーマ 〈チームビルド・仲間づくり・活動の閉じかた〉
それぞれの道をみつける
日程 令和5年10月4日(水) 18:00～20:00
会場 堺市役所本館3階第1会議室
講師 上田PD、中協PO
参加者 8人

内 容

中協POからは数々のプロジェクトを立ち上げてきた経験から、チームビルドの秘訣として「中心人物を2人にする(パワーバランスを分散する)」、「コア・ミドル・ライトの関わり方の仕掛け(グラデーションを認める)」といったことが話されました。参加者は、組織基盤に悩む人、終わりを意識して若い人にどのように伝えていけるかを考えている人、しがらみと現実の差異に頭をかかえている人といった様々な立場の人たちが集まりました。意見交換では「継続を念頭に仕組み化していくことが良いのか、想いを持った人たちがいる間に終わらせていくことが良いのか」といったことが話され、自分の位置、組織の位置を再確認することになりました。

●第2回

テーマ 〈活動の実施〉本番までのポイントを整理する
日程 令和5年8月24日(木) 18:00～20:00
会場 堺市役所本館3階第1会議室
講師 川那辺PO
参加者 3人

内 容

川那辺POから企業とNPO法人によって児童館の子どもたちに対して提供したプログラムの実現までのやりとりが話されました。コーディネーターの仕事は、プログラムで使用するものの準備からキーパーソンとの調整にまで及びます。一般的な「裏方」という範疇をこえ、アーティストや観客だけでなく、依頼者や協力者の間で立ち回りながら、協業していく仕事であることがよくわかりました。コーディネーターの仕事は暗黙知として取り組んでいることが多いため、今回のような勉強会には大きな意義がありました。

●第4回

テーマ 〈報告・評価〉振り返りから始める活動のススメ
日程 令和6年1月30日(火) 15:00～17:00
会場 堺市役所本館地下1階食堂横会議室
講師 大澤PO
参加者 8人

内 容

大澤POから、振り返りはPDCAサイクルの「C」にあたり、いつ、だれと、どのように、振り返るのか、というポイントが話されました。「反省会だけでなく、打ち上げからレセプション、報告会なども“振り返り”です。それがどういったことを目的にしているかを自覚しないといけない」という話題が印象的でした。音楽、映像制作、絵、ペン習字など様々な活動をする人が参加してくださいました。ペアをつくりそれぞれの自己紹介とともに一年の活動報告をするグループワークをしてもらいました。年度末の開催にふさわしく、自身の活動を振り返りながら学ぶ機会になりました。

交流会 さかいとあーと井戸端かいぎ ～ゆるく話そう。地域とアート、つながりづくり～

昨年度から始めた「さかいとあーと井戸端かいぎ」。堺市内でさまざまな活動をされている方同士が出会い、つながる場として毎回それぞれテーマを設け開催しました。

テーマごとにワークを用意して話しやすくなるよう工夫しました。たとえば5月の「教えて!あなたの「堺とアート」」では、参加人数が多かったため6つのグループに分かれ、ワールドカフェ方式で3つのお題 ①教えて!あなたの「堺とアート」 ②「協働」と聞いて、思い浮かぶことは? ③お困りごと・お悩みごと、ありますか?)を設け、お題ごとにグループを替えながらできるだけ多くの人と話せるようにしました。また、7月の「活動の喜びや苦勞はどんな味わい?」では、参加者に自分の「人生の生き心地」と「活動(仕事)における生き心地」を折線グラフで表してもらいました。

「人生の生き心地」と「活動の生き心地」が並行している方もいれば対極になっている方もいて、懐かしい思い出やターニングポイントを語ってくださいました。「さかいとあーと井戸端かいぎ」は参加者の活動だけでなく、その方自身を深く知る機会になっているように思います。

3月の「やっぱり、わたしはこれが好き!」では、終了後参加者同士で連絡先を交換されていて、新たな交流が生まれていることを実感しました。ほかに参加者から「時間が足りない」、「(テーマ設定のない)フリータイムもほしい!」といった声もいただきました。個別相談会を利用される方も増えてきています。

令和6年度も、堺市内で活動する方たちのよりどころとなるような場をつくってまいります。

●第1回

テーマ 教えて!あなたの「堺とアート」
日程 令和5年5月22日(月) 14:45～16:00
会場 堺市役所本館地下1階大会議室
参加者 24人

●第3回

テーマ アートからSDGsを考える
日程 令和5年9月13日(水) 14:30～15:30
(個別相談会 15:30～16:00)
会場 堺市産業振興センターセミナー室1
参加者 4人



●第2回

テーマ 活動の喜びや苦勞はどんな味わい?
日程 令和5年7月14日(金) 10:30～11:30
(個別相談会 11:30～12:00)
会場 堺市立東文化会館研修室
参加者 4人

●第4回

テーマ やっぱり、わたしはこれが好き!
日程 令和6年3月6日(水) 14:30～15:30
(個別相談会 15:30～16:00)
会場 堺市役所本館3階第1会議室
参加者 11人



広報

●公式ホームページ(堺市ホームページ内)

堺ACが実施するイベントや活動報告についてのお知らせを随時更新しています。



●地域でアート活動をするためのヒント集



●公式SNS

堺ACの活動紹介、補助金採択事業の開催情報、文化芸術イベントの情報等を発信しています。



●ニュースレター

●チラシ



令和5年度の堺アーツカウンシルの活動について語りました。

座談会メンバー

プログラム・ディレクター (PD) 上 田 假奈代

プログラム・オフィサー (PO) 大 澤 寅 雄
柿 塚 拓 真
川那辺 香 乃
中 脇 健 児
宮 浦 宜 子

▶全体所感 地道にコミュニケーションをつくりつづける

中脇PO: まず上田PDから今年の活動全体について聞いてみましょうか。

上田PD: 多くの方が相談に来てくださるようになり、市民の方たちとの関係は深まっている実感はありますが、令和5年度の補助金は申請件数が47件に減ってしまいました。今年度はコロナ禍で、活動するにはまだまだ厳しい状況。もし補助金を受けても、実施するまでのハードルの高さもあったのでしょうか。次年度(令和6年度)の申請件数は回復し、67件に増えました。コロナ禍を経て皆さんが活動に前向きな気持ちになったところに「アーツカウンシル、相談に乗ります!」と、POの皆さんが親身に対応したこともあって、申請件数が増えて本当に良かったなと思っています。でも数だけで評価が定まるというより、定性的なことも加えて評価を出していけたらいいなと思っています。

堺市文化振興財団(以下「財団」と一緒に実施しているモデル事業は中脇POと上田が担当しています。文化会館等の職員の人たちが3人1組のチームを組み、現場の方たちへのヒアリングやアーティストの選定を行い、どんなワークショップにしていけば話し合っ実践していくという2年間のプログラムです。令和5年度は子ども食堂、病院、高齢者の方のデイサービスの3ヶ所で実践編としてアウトリーチを行いました。それぞれのプログラムにパワーがありました。振り返りしたときに、他の文化会館の人たちとコミュニケーションが生まれ、堺の中で同じように頑張っている職員がいる、繋がっていると感じたことが挙げられました。2年間一緒に並走したことでチーム感が生まれ、社会包摂的な広がりが増えたことが印象深いです。自分たちの仕事がかんたんに社会や地域に関われるんだと実感されたと思います。次年度はこの2年間で1年にギュッと締め、文化会館の職員の方以外にも、市民の方との窓口となる様々な立場の方たちにも参加いただきます。こうした方々の底上げにアーツカウンシルも関わっていくことで、アーツカウンシルの新しい役割を見出せたのではと思います。

ほかにも、勉強会・交流会を継続し、ニュースレターで私たちの活動をお知ら



撮影: 成田舞

せるなど地道ながらもコツコツと活動してきました。

中脇PO: 市内で活動するプレイヤーの方々への視察や伴走支援、文化施設に従事している方々の研修事業、大きくは2つの事業を展開していましたね。視察は川那辺POがよく行ってくださってましたよね。

▶視察 出会うことで、繋がりが生まれる

川那辺PO: 今年はやはりコロナ禍が明けたのが大きかったと思うのですが、視察でたくさんお伺いさせていただきました。3年間積み重ねてきたおかげで、堺で活動している方々との繋がりが増えたという実感もあります。最初の頃は「視察」イコール「(申請通りに事業が実行されているか) チェックしに来ている」と思われていたのですが、私はそうではないとしっかりお伝えしています。以前視察に伺った方に「この日は相談窓口にいるのでよかったですか」と連絡したら、「行きます!」と返信が来て、当日にお孫さんと一緒に来られたこともありました。急遽、お孫さんのお守りをするようになったそうなのですが、私なら子どもがいても大丈夫だろうと思ってくださったのかなと嬉しかったです。



▶相談 言語化をうながすために

中脇PO: 堺市は文化芸術を通じた社会包摂をめざしていますが、相談業務のなかでも、相談者に社会包摂的な取組を考えてもらうようなやり取りはあるのでしょうか。

上田PD: 意識はしていますね。相手によってその方が腑に落ちる言葉ってあるじゃないですか。「子どもに来てほしい」という想いがあるとしたら、「どんな子どもに来てもらいたいですか。普段芸術に触れている子どもですか。そういう機会の少ない子どもでしょうか。そうした子どもが参加しやすくするにはどうしたらいいですか。」って、具体化していくように聞きますね。補助金に申請したいと思っていらっしゃるのであれば、募集要項に寄せていくように質問をしたり、興味を引っ張り出すことはしていくようにしてますね。

川那辺PO: 補助金に通じたくても、なにをやりたいのか書けない人もいらっしゃいます。お話すると、やりたいことや目的意識はしっかり持っていて、社会包摂的な取組でもあるのに、申請書に表れてこないのは残念です。そのことを書いてください、とお伝えするんです。時には、「仲間と喋ったら、いろいろ言われて」と、関わる人たちに気を遣って意見を取り入れすぎたんでしょう。2回目の相談で申請書を見たら、1回目に話していたことと内容が異なっていたことがありましたね。励まして、初心を思い出してもらいました。

中脇PO: それぞれのPOにキャラクターがありますよね。上田PDや川那辺POは文化活動を始めた方から、新しい展開を試みたいとしている方など幅広く一緒に考えようという姿勢ですね。一方、柿塚POはオーケストラなど舞台芸術の専門性の高い相談が多かったのではないですか。

柿塚PO: 確かに、令和6年度の補助金に向けた説明会の後の相談会では、長く活動されているパレエ工団、株式会社で地域貢献のためにクラシックのイベントを制作されているところが印象に残っています。僕の担当する個別相談日は2日間とも予約でほぼ埋まりました。相談される事業の専門性は高かったと思います。でも、申請書の相談であれば、二人と同じようなことですね。「課題の把握」に、「お客さんの文化芸術に親しむ機会が減っている」とか、「堺市では大阪と比べると芸術の機会が少ない」といったありきたりなことが書かれているんですが、具体的にあなたにとってどういうことなんですかって聞きます。「子どもに(音楽を)聞いてほしい」ということだったら、子どもに聞いてほしいってどういうことですか。と。定型文になっちゃうと、その言葉で思考が止まってしまう。だからあなたが本当にしたいことは何ですか、と聞くようにしていました。僕はタイミングが合わず、公演の視察には一度も行けてないんです。だけど、事前相談は、オンラインやメール、電話でずっと続けました。



▶相談・視察の分析
相談内容の深化と視察を通して情報を集める重要性

大澤PO: とりあえず今年度を振り返るため、相談のフォーマットと視察のフォーマットの集計を今の時点でまとめてみました。今年度は、圧倒的に相談件数が増えた。増えただけじゃなくて、その質問の内容をざっと見ると、これまでと全然違うなと思いました。「(申請書に) どう書いたらいいですか」という初歩的、形式的な相談から、「自分たちの活動をより内省的に言葉にしたいけど、どう書いたらいいのか」というような相談になっている。PD・POがそれに対応するには、結構高度な、相談相手の活動に対してある種の理解と共感が両方必要なんだろうと思いました。それが変わってきたところです。相談が増えた

いうこと自体は、アーツカウンシルの一つの成果でもあり、アウトプット(結果)としても、見えてきた変化といえるでしょうし、コロナ禍明けだから申請件数が増えただけじゃないと僕は思っています。環境の変化と親身になって相談を何回も聞いてやり取りするというコミュニケーションがあるから増えていることを僕は評価すべきだと思う。そういう意味では、このアーツカウンシルの一つの成果が見えた変化だと思います。

一方、視察は件数としては減っています。これまで文化課と視察の意味合いについて、何のための視察なのか明確ではないところがあった。補助金を受けている団体を視察に来てチェックしている、監査のために行ってるような見られ方をされかねないというのもあったかもしれない。相談件数が増えたことは、文化芸術団体側から来てくれてアーツカウンシルが答えるという受動的なコミュニケーションである「相談」が急に増えていることになるわけだけど、アーツカウンシルに求められるコミュニケーションのあり方として、本来的にはこちらからも行く必要もあるのではないかと。そして「視察」はこちらから情報を集めに行くというスタンスのものじゃないかと、僕は改めて思いました。

▶社会包摂を意識していたか?

中脇PO: 堺市文化芸術活動応援補助金は地域の課題解決や社会包摂が重視されていますよね。相談者の方は意識されていましたか。

川那辺PO: グラデーションはあるけど、自分たちのお稽古事や発表会ではなく、地域の課題を考え、社会包摂的な取組でないと通らない補助金だとわかったうえで相談に来ていらっしゃると思います。

柿塚PO: 募集要項には共生社会、地域の魅力向上と書いてますけど、これって具体的にどうなることなんですか、ということですね。例えばパレエ教室だったら、話を聞くと「最近では子どものパレエ人口が減っている。一方で80歳の人も教室に来ていて、去年はその人たちと子どもたちが同じ舞台にいたんですよ」と。共生されているんですよ。それに習い事として参加している人たちは家族連れです。兄弟たちはどうしてるんですか、と聞いたら、「託児室を設けたり、親子室を常に開放してるんです」と。工夫をしないことには家族は来れないことをわかっていて取り組んでいらっしゃるんです。無意識にすでに共生社会に繋がってますよね、という話をすることができました。

宮浦PO: ビッグアイのホールで定期演奏会をされている団体が、ビッグアイは障害のある人たちが日頃利用されている場所だけど、そのことについて気がついていらっしゃるなかったんですね。ビッグアイだったら、障害のある方に向けての設備も整っているし、車椅子の席もありますよ、と言うと、「そんなことを一度も考えたことがなかっ

た」と。単純にお客さんを増やすという意味でもそれだけ設備が整っているとしたら、ホールにも障害のある方を受け入れる専門家もいるのだから、相談するだけで多分できることが増えますよね。相談の時にお伝えしたら「すぐ申請書にも反映させます」、「ビッグアイの担当者にも相談してみます」と話されました。

上田PD: ポルトガル語のブラジル音楽のワークショップを相談にいらっしゃった方が、ご自身がヤングケアラーだったことからヤングケアラーを支援したい気持ちがあるとわかってきました。チラシにヤングケアラーを応援します、ヤングケアラーの方は無料ですと書いてみることにしました。本当にゆっくりだけで、この補助金や対話することがきっかけになって、広がっていくと良いですね。

中脇PO: アーツカウンシルがコーディネーター役を担ったケースもありますか。

上田PD: 補助金が採択され、書道の展覧会を開く事業で市民公募したけれど作品が集まりづらいという話をお伺いし、障害者施設を紹介してワークショップを行い、展覧会をされたのが昨年度です。好評で今年度も他の障害者施設を紹介してください、ということで、堺市立健康福祉プラザを紹介し、直接相談に乗ってもらえることになりました。私もいっしょに健康福祉プラザにお伺いしたところ、協力が得られ、6つの施設から参加の希望が届きました。結局1年に2ヶ所ずつ、都合3年間は続けられそうです。あとは、補助金のスタートアップの3年間で終わる際、次にどんな風に展開するのが岐路ですね。

▶視察をR&D（リサーチ&ディベロップメント、研究開発）として捉える

大澤PO: 相談のデータを見たときに、気になり始めたのが、「再来」の割合が50%を超えたこと。最初にスタートしたときは全部「初回」だけど、こんなに再来の割合が増えたことは、このまあいっしょと再来ばかりになって、話を聞いてほしい人の話を聞く場になってしまいかねない。それはそれで必要だけど、アーツカウンシルの役割は、新しいニーズを開拓したり、新しい課題を発見したりしていかないと。これまでデータを取って、相談、視察の件数をカウントして、その結果、相談がこれだけ増えて、視察のあり方がまだ見えてこなかったけれど、視察の捉え方を今後見直しで開発・開拓していく、リサーチに行くという発想に変えていったらどうかな。こちらから出会いに行って、R&D（リサーチ&ディベロップメント、研究開発）をやっていく。例えばエリア的には堺区が圧倒的に多いから、その周辺の堺市内のアクセスしにくいエリアや、既に活動しているのに補助金の申請がまだ出ていない活動があると思うか



©Nonoko Kameyama

ら、積極的に情報収集して、社会包摂・共生社会に取り組む企画を出してみるように提案していくことができればいいですね。

川那辺PO: 初年度からその話はしていますね。来年は一件でもいいから絶対行くと決めて、気合いを入れたい。

中脇PO: そうしましょう。次年度はスモールチャレンジで1件はそうしよう。では宮浦POは情報発信に取り組まれているかでしたか。

▶情報発信はコツコツ地道に

宮浦PO: 今年、私はタイミングが合わなくて視察に行けず、情報発信と、補助金の相談対応を担当しました。情報発信では、ニュースレターは私が担当していますが、ウェブやチラシの発信は文化課が担当しています。情報発信はなかなか成果が見えにくい。でもやらなければ何も変わらないので、コツコツ続けるしかありません。補助金申請前の相談では、図書館で補助金のチラシを見つけて「これだと思った」と来てくれた方がいました。市民の方が立ち寄りやすいところに、種まきだと思って、あちこちに蒔いておいたら、どこかで芽が出るんだなって実感したんですよ。本当に地道にだけ。

また、ニュースレターでPOコラムを始めました。私達はそれぞれ個人の専門や活動を活かして、POとして活動していますが、これまでのアーツカウンシルの事業では見えにくかったのかもしれない。コラムを通して、堺アーツカウンシルのメンバーのパーソナリティやそれぞれの得意分野が伝わったのだと思います。



上田PD: 今年は勉強会の話提供もPOがそれぞれ担当しましたね。そのためのサブテキストとしてヒント集を作り、堺市のHPからダウンロードできるようにしました。ヒント集を読んで、こういう人がいるならと、相談窓口にいらした人もいました。

宮浦PO: 本当に小さいことだけど、いろんな場所でちゃんと違った角度の情報発信を、積み重ねていくことで、アーツカウンシルを知ってもらい、メンバーにはこういう人がいるんだって伝わっていくのだと思います。

▶モデル事業を地域に繋いでゆく

大澤PO: モデル事業と補助金の事業を繋げられないかな。モデル事業で取り組んだことを補助金の事業の方に波及させて、そのノウハウを共有する。「こんなやり方が他の地域でも、他の場所でもできますよね」という風に、リサーチとコーディネーション（連携）ですね。

中脇PO: 確かに。僕は上田PDと担当した堺市社会福祉協議会（以下「社協」）と地域のNPO法人と取り組んだモデル事業が印象深いですね。地域の民生委員や学校の制度では扱い上げられなかったヤングケアラー案件でした。社協は地縁組織である町内会や自治会のプレイヤーを知っているけれど、高齢化されていますよね。拾いにくい案件もあるわけです。話を聞いて、僕らはアーティストがワークショップをするようなタイミングではないと判断して、それで話し合う場を作ることになったんです。社協、地域のNPOと何度か集まりました。結局、僕らとしてはアートプログラムを立ち上げるようなことはできなかったけれど、社協だけでは作ることのできない「人の接点」が作れた。これをきっかけに社協の催しに広がりが生れたり、社協の地域スタッフがそこに混ざることができた。社協とアーツカウンシルの関わりは今後も歓迎されています。モデル事業と補助金事業をつなぐこともそう遠くないと思う。ちなみに上田PDはモデル事業である文化施設の職員とのワークショップ実践研修が2年目になり、職員さんの意識の変化は？



上田PD: 参加された職員さんがパワフルに、自信がついた感じがします。ご自身の仕事場（文化会館等）に戻って、新規事業のアウトリーチ担当になった方もいるそうです。参加者から、そこで立ち上がったコミュニケーションには価値を感じる、という声もありましたね。同じ堺市内の文化施設で働いてはいるけれど、普段いっしょに仕事していない人とチームになって、新しい場所でも取り組んだ。それを財団の常盤さんと私達が下支えをする。その上で突破していく感じというのは、本当に実践で、ヒリヒリした体験だったと思います。

中脇PO: ちょうど僕もアサダワタルさんの耳原総合病院での取組の振り返りにオンラインで参加したんです。アサダさんは今回生まれたメソッドを使って、病院が新入社員研修や、病院が持っている地域の施設でも展開してもいいんじゃないかって話していて、それに病院側も乗り気になったんです。モデル事業は事業後が結構大事な気がしますね？社会包摂と言いながら単発で終わってしまうのは残念。展開のことも、展開についての評価も考えていきたい。

上田PD: 協働した財団としても、今回3事業行ったけれど、もし続けたいと、受け手側が思ってくださったら何とか続けたいと言っていました。子ども食堂では社協の助成金もあるので、今回実践した子ども食堂がそうした外部資金獲得まで挑戦してくれたらうれしいですね。モデル事業は先があるといいと思うけれど、最初に用意できるものではなくて、そういう意味ではあらゆる可能性を意識しておく必要があると思うんです。

▶地域にアーツカウンシルが存在する意味

柿塚PO: 皆さんの話を聞いて改めて思ったのですが、僕は地域アーツカウンシルが未だに分からない。予算も少ないし、地方はプロが少ないのにアーツカウンシルが助言や視察をしたところで何も変わらないのではと。国の文化政策が行き届かないから地域でやろうとなると思いい意味で細分化してしまう。文化って、細かく見れば見るほど、どんどん細かくなっていく。川の向こうとこっち側で、旧市街地と新興住宅地で違う文化となってしまうが、そうなるってバラバラになって物事は進まない。今でも半分はそう思ってるのだけど、これまでのアーツカウンシル活動でそうじゃない部分があるかもしれないと思いました。

中脇PO: たとえば、どういったところに可能性を感じたのでしょうか？

柿塚PO: ちょっとした小さな変化とか発見とか工夫を促すことを地域アーツカウンシルはやっていくし、やっていくんだと。例えば、車椅子の人が急に来られても困ります、と言っていた団体の人が、でも補助金もらっているし、アーツカウンシルのメンバーも相談に乗ってくれるから、何か対策をしようと考え始めたり。既存の場所でクラシックのコンサートをしていたけど、次は保育園や子ども食堂に行ってみよう考えるようになったとか。チラシにご自身が大事にしたいことを書き込んでみたら、一言ずつめったに、それを介して出会う人が増えたとか。いきなりたくさんの人に居たり、包摂できないけれど、自分の周りの1人や2人はそのことで、幸せになっていくかもしれないという気はしています。それは「アマチュアには無理でしょう」とか、「プロがいたとしてもプロデューサーがアマチュアだったら」と諦めていたら、こうはならなかったと思うんです。アーツカウンシルとして地域でのアート活動を深めることを謳って、謳った後のサポートを我々がある程度はできたから、そういう風になっていったのかなという気がするんです。

上田PD: 現在、日本に約20のアーツカウンシルがあると聞いています。それぞれの体制や仕組み、規模感は違い、堺アーツカウンシルは基礎自治体の小さなアーツカウンシルです。プログラム・ディレクター、オフィサーの専門性をいかし地道な取組を続け、市民に近いことが特徴だと思います。さらに財団と協働し文化施設の職員のコーディネート力を向上する研修を行い、また社協と連携するなど、有機的なネットワークが先進的な取組につながっていると思います。とはいえ、まだまだ市民の方から「アーツカウンシルってなに？」と言われることもあります。言葉を知ってもらいよりも、地域で創造的な取組が表現され、人々がゆるやかにつながって、ともに生きることを実感できるよう、今後も活動していきます。